

和合亮一さん

(詩人)

震災を語り継ぐのを「あきらめない」

福島在住の詩人である和合亮一さんは震災と原発事故以後、詩作だけでなく、聞き書きにも挑戦している。そうしてできた一冊が、被災者の言葉を集めた『ふるさとをあきらめない』（新潮社）だ。福島を、ひいては日本を襲った事態と向き合うため、ひたむきに言葉を紡ぎ続けてきた和合さんに、詩、言葉、ふるさとについて聞いた。

「嵐」「雲」「光」に導かれて

——二月に刊行された『ふるさとをあきらめない』は、被災者の方へのインタビューを本にまとめたものですが、詩人である和合さんがこのような本を著した経緯を教えてください。

昨年六月に、『詩の磔』『詩ノ黙礼』『詩の邂逅』という三冊の本を同時に刊行しているのですが、これらは『ふるさとをあきらめない』の刊行へと私を導いてくれた大切な三冊です。

「い」いうアナウンスが流れ続けました。多くの人が、家から一歩も出ることができない厳しいストレス状態の中で、ともすれば自分の存在意義や生き方を見失いそうだったといえます。

いま振り返ると、私も同じような状態だったと思うのですが、「新たな詩人よ……」の一節は、混沌とした精神状態にあった私にとって、宮沢賢治から直接語りかけられた言葉のように響きました。それ以来、『嵐』『雲』『光』がキーワードになったのです。



●わがごう・りょういち 一九六八年福島県生まれ。『ATC』で第四回中原中也賞、『地球頭脳誌』で第四十七回晩翠賞、福島県で高校教諭をしながら詩作活動を行っていたが、東日本大震災で被災。その後、自宅からツイッターで詩を発信し続け、大きな反響を呼ぶ。

私の中で、『詩の磔』は「嵐」、『詩ノ黙礼』は「雲」、『詩の邂逅』は「光」にたとえられます。

嵐と雲と光——。このイメージは、宮沢賢治の詩「生徒諸君に寄せる」の「新たな詩人よ／雲から光から嵐から／新たな透明のエネルギーを得て／人と地球にとるべきかたちを暗示せよ」という一節に由来します。

——「人と地球にとるべきかたちを暗示せよ」——。すごいフレーズですね。

震災直後、私の住む地域（福島県伊達市）には高濃度の放射能が降り注ぎ、「不用意に外出しないでください

『詩の磔』は、震災がもたらした破壊的な状況や、原発事故が招いたさまざまな葛藤や軋轢に、突き動かされるように書いたもので、まさに「嵐」そのものです。

『詩ノ黙礼』は、鎮魂から生まれました。地震から一カ月後ほどでやっとガソリンが手に入るようになったとき、相馬と南相馬に行きました。南相馬は高校教師でもある私の、初の赴任先であり、六年間暮らした土地です。津波によって何もかもが流されてしまった光景には涙し、失ったものの大きさに呆然としました。教え子や、教え子の親など、多くの知人も亡くなり、生まれて初めて鎮魂の詩を書きたいと思いました。

多くの命が流れていってしまった海の上を、重たい雲が覆っている。その重たい「雲」が、『詩ノ黙礼』に結実したという感じで、書いているときは死者と対話している思いだったのですが、そのうちふと、生きている方とも対話がしたいと思うようになりました。

南相馬で懇意にしていた人や避難所で知り合った人など、七人の方々と私の対話、そして、対話から生まれた詩を収めて編んだのが『詩の邂逅』です。

『詩の邂逅』を刊行したあとも、よりたくさんの人から話を聞き、思いを記録に残したいという気持ちは続